

第14回国際エチオピア学会に参加して

増田 研

2000年は現アディスアベバ大学が、University College of Addis Ababa としてはじめて設立されてから50周年にあたる記念すべき年である。そのアディスアベバ大学において、2000年11月6日から11日まで第14回国際エチオピア学会(14th International Conference of Ethiopian Studies)が開催された(注1)。エチオピアに関心を抱く研究者にとっては3年に一度の大イベントでもあり、参加者はみなそれぞれの関心を抱いて臨んだにちがいない。これは日本的な意味での学会組織をもたないため、Conferenceという名前が示すように、むしろ「国際エチオピア学会議」とでも訳した方が正確だが、われわれ日本人研究者は通常これを「学会」とよんでおり、本報告ではこの慣例に従う。日本的コンテキストでも、ふつうは「学会」といえば、学会組織そのものよりも学術大会を指示するが、それと同じである。

配布されたプログラムによれば、当初発表を予定されていた発表は254件である。このうち、私を知るだけで13件、実際にはもっと多くのキャンセルがあったであろう。最終的には200名強が研究発表を行ったと思われる。エチオピア国内、国外をとわず訪れたオブザーバーをふくめれば総計で300名ほどが参加していたのではないだろうか。

日本人の参加者は、前回京都で開催されたときほどには及ばなかったが、日本国外で行われたものとしては最多数であったろうと思われる。本学会員では順不同で福井勝義(京都大)、栗本英世(大阪大)、三宅理一(慶応大)、児玉由佳(アジア経済研)、曾我亨(弘前大)、小草牧子(慶大院)、藤本武(京大院)、それに私が研究発表を行い、重田眞義(京都大)、西崎伸子、金子守恵(ともに京大院)らがオブ

ザーバーとして参加した。また本学会員ではないが、エチオピアンダンサーとしてつとに知られるユウコ・バーバリッチさんが、ダンスの実演を交えた研究発表で好評を博した。大阪学院大学のマイケル・シャクルトン氏、および在エチオピアの日本人研究者らもオブザーバーとして参加した。

学会のすべてをここで報告することはとうてい無理であり、なおかつ私自身もすべてのセッションに顔を出したわけではない。以下にしるすのは、私がいかに実際にみた様子と、他の参加者(国籍を問わず)から得られた情報とを総合したものである。感想、あるいは印象に類する記述のほとんどは、私自身のものであるが、情報そのものに若干の誤りが含まれている可能性もある。その場合の責任は私にある。ここでは情報源についてはとくに明記しないことにする。

政治性の回避？

国際エチオピア学会は、ここ数回、いずれもどこかしら政治的な雰囲気や漂わせてきた。前回、京都で開催された際には、オロモをめぐる論議がまき起り、研究者間の暗黙の対立関係が浮き彫りにされた(注2)。1994年にミシガンで開催された際にもやはり、新しい国家体制に移行してはじめての学会ということもあり、政治色を避けて通ることができなかった。さらにその前、1991年には、アディスアベバにおける学会の開催とメンギスツ政権の崩壊がほぼ同時期であった。

このようにエチオピアにおいて、あるいはエチオピアについて研究するということには、程度の差はあれ、政治的なものに触れざるを得ないという側面がある。これをエチオピア・アカデミアの特徴と言

い切れるかどうかはわからないが、たとえば1993年4月のアディスアベバ大学教員大量解雇事件など、「学問の中立性」が絵に描いたもちに過ぎないことを知らされる。

こうした観点からいえば今回の学会では、1998年5月に勃発し、つい先だって終結した(とされる)エチオピア・エリトリア戦争が話題の中心になるはずであった。私個人としては、この学会において学問的立場からの解釈あるいはメッセージが投げかけられるものと思い、大変に期待していたのだが、残念ながらその期待に答えるような議論はほとんど見られなかった(注3)。その理由をひとことでいえば「政治性の回避」ということでもなろうか。今回、戦争そのものをとりあげた発表は、プログラム上に数件存在したが、私の知る限り、その内の2件だけがさきの戦争そのもの、あるいは戦争をめぐるポリティクスを扱ったものだった。ひとつめはPatrick Gilkes氏のインターネット上における戦争プロパガンダの報告、もうひとつはChristopher Clapham氏の報告で、興味深いことにこのセッションのパネリストは2人もイギリスからの参加者、なおかつ会場で質問やコメントを寄せたのも、ほぼすべて欧米人であった。エチオピア人が誰もその場にいなかったわけではない。にもかかわらず、この極めてホットな問題に対する、かれらの対応は素っ気ないものだった。この戦争そのものが議論するに値しないと判断されたのだろうか？ それとも、あまりにホットすぎてまだ議論できないということだろうか？ いや、それよりはむしろ、アディスアベバ大学内の派閥関係がからんで、下手な政治的発言、あるいはそれと意図しなくても政治的に解釈されがちな発言は慎もうという雰囲気があったのではないか。これらはいずれも私の邪推であるが、どうだろうか。「さわらぬ政治に失脚なし」というのが今回の私の印象なのである。

同様に、メンギスツ政権時代についての研究発表がまったくなかったのも気になる。たとえばDonald DonhamがMarxist Modernを1999年になって出版して社会主義時代を検討したように(注4)、このデルグ時代はすでに批評の「安全地帯」に入っているはずだ。にもかかわらず今学会ではエチオピア社会主義についての深い議論どころか、問いすらも発せられなかったように思う。そういった意味では今学会はChallengingでもExcitingでもなかった。

プログラムの問題

全体的に学会はよくオーガナイズされていたが、多くの知人たちからプログラムの組み方に関する不満を聞かされた。それらを総合すると、問題点は大きく2つに分けられるようである。

まず第一に、セッションの数が多すぎたという問題がある。今回、「歴史学・考古学(1)・(2)」「人類学・社会学(1)・(2)」「言語学」「文学」「法学・政治学」「教育学」「宗教・哲学」「開発と環境」のあわせて10のセッションが組まれたが、この区分けが細かすぎたのではないかという意見があった。たとえば発表者の少ない教育学や開発のセッションはひとつにまとめてもよかったのではないか。実際、両者のセッションは参加者が非常に少なく、寂しかったことは否めない。開発のセッションなどは、200名以上収容可能なホールを会場にあてがわれながら、オーディエンスがほんの数名などということが多く、発表者たちの意気を消沈させたであろう。

第二に、いくつかの発表について、それぞれのセッションへの割り振りが適切だったかどうか疑問な点がある。発表予定者は自分の研究がどの分野に属するのかを自己申告できたが、プログラムを組む段階ではかならずしもその申告通りにはならなかったようである。割り振りとはときにはテーマごとに、ときには地域ごとになされ、一貫した基準があったかどうか怪しい。たとえば「自分は開発にコミットしている」と信じている研究者が、対象が牧畜民であるという理由で人類学のセッションに組み込まれたり、歴史研究をしている研究者が、その研究が経済史的なものであったために開発に回されたりといったことがたびたび起こった。学会の規模が大きいにプログラム編成は難行であったろうが、各セッションの枠をもう少し広げて学際的な色を持たせてもよかっただろうと、私などは思う。歴史学や言語学などをのぞけば、むしろ領域横断的な研究が多いのであるから、官公庁ばりの縦割りを捨て、もっとフレキシブルな区分けが必要であろう。かくいう私の場合も、専攻は社会人類学であるが、発表タイトルが「文化的葛藤における教育」であったために教育学のセッションにまわされた。これはこれで他流試合的な楽しい経験ではあったが、残年ながら他の発表者の自然キャンセルに巻き込まれて時間が繰り上がってしまい、人類学関係の知人たちに発表を聞いてもらえなかったという不運もあった。

以上の問題点と関連していくつか付すると、個人発表が学会開催期間の前半に詰め込まれ、偏っていたという問題もあった。教育学と宗教・哲学のセッションは3日目に、開発および法学・政治学のセッションは4日目に、それぞれネタ切れとなった。最終日の11月11日まで発表が続いたのは歴史・考古学の2つのセッションと人類学・社会学(1)だけである。こういうことがあると、なおさらプログラム構成に疑問がわいてくる。たとえば学会のはじめの3日間、私たちはあまり編集のよくない、非常に見づらいプログラム冊子を前に後ろにめぐりながら聞きたいプログラムをチェックしたが、「これは見逃せない」と思わせる発表が同じ時間に集中していたりして、悔しい思いをすることが多かった。これは俗に「バッティング」とか「裏番組」などと呼ばれるような事態である。

しかたがないので、私たちは2人もしくは3人組のセッション(1時間~1時間半)をまとめて聞くのをあきらめ、「ここで1人聞いたら次は別の部屋で〇〇さんを聞く」といった、それぞれの詳細な予定表を作ったのだが、これはあいつぐ発表キャンセルによってほとんど無意味となってしまった。

発表キャンセルこそは、今学会を特徴づけ、なおかつ私たち参加者を振り回した最大の難敵であった。ひとつのセッションに予定者がすべてそろって、プログラム通りに進むことはほとんどなく、発表者が姿を見せずに自然キャンセルとなってしまった発表がどのセッションにも一つはあった。そのため他の発表者が時間を繰り上げてはじめることになり、時間を見計らってやってきた聴衆がおれ当ての発表を聞き損ねたということは日常茶飯事となった。ここでは、時間が空けばさっさと使ってしまうとばかりに繰り上げてしまう。このやり方には、プログラムの時間をめちやくちやにするという欠点があるが、反面、一人の発表時間に余裕ができ、ディスカッションの時間をたっぷりもてるという利点がある。どちらがよいのか私には分からない。しかし、こうしたスケジュールの混乱に乗じて、発表者の側が持ち時間にルーズになってしまうのはやはり否定的な側面としておくべきだろう。

また今回は、様々の理由で参加できなかった人々の中にWendy James、Donald Donham、Jon Abbinkといった人たちがいた。彼らが来ていたならば、この学会はもっと意義深い、内容の濃いものになった

に違いない。救いとしては、当初発表を予定していたながらキャンセルを表明していた福井勝義とイヴォ・シュトレッカーが、急遽口頭発表の意思を表明し、11月10日(金)の午後に、人類学・社会学の部門で緊急セッションが開かれたことだろう。ともに30年以上に渡って南西エチオピアで活躍する人類学者であること、その業績による知名度、また発表内容がともに「戦争」をめぐるものであっただけに、ふたりのやりとりに注目が集まった。

未来に向けて

以上、どちらかといえばネガティブな側面を中心に書き連ねてきたが、もちろん私にとってはこの学会に参加することは楽しい経験であった。なにより1年ぶりのエチオピア訪問であり、多くの知人友人に再会することができた。その多くは私と同様にひととおりの調査を終えて博士論文などを執筆中かあるいは博士号を取得したばかりの、20代から30代にかけての研究者たちである。

学会期間中しばしば耳にしたのが、あらゆる分野におけるこうした若い研究者の台頭である。とくに人類学の分野において、ドイツ、フランス、エチオピアそして日本からも若い世代の研究者が続々と研究成果を発表している。私も含めたこうした研究者たちが、エチオピア研究のシーンにおいて、いずれは中核を担わなければならないことを思えば、私たちは何らかの形で恒常的に連絡を取り合い、業績を交換し合うためのネットワークを構築すべきではないだろうか。

こうしたエチオピア研究の未来を考えるうえで見逃せないのは、最終日の全体セッションでアディスアベバ大学のアルーラ・パンクハーストが行ったプレゼンテーションである。氏はエチオピアにおける人類学的研究を概観し、イタリア、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカ、日本といった諸外国の研究者たちがどのような特色ある研究をおこなってきたかについて、膨大な資料を整理し提示して見せた。時間的な制約もあり、本来なら追究されるべきそれぞれのトレンドの歴史的背景への言及はなかったが、それでもこの発表を聞いて、エチオピア研究における日本人研究者の貢献のあり方について思いをめぐらさなかつた者はいないだろう。幸いここには日本ナイル・エチオピア学会という母胎が存在し、英語での出版も継続して行っている。しかし今

後はそれ以上の、より具体的なコミットメントが求められることになるだろう(注5)。

学会の運営について述べれば、本学会は私が予想した以上によく組織され、進行そのものを妨げるようなことはなにもなかった。たとえば今回はじめて発表プログラムがウェブ上で公開された(<http://www.ies-ethiopia.org/>)。

参加者はプログラムと要旨集、それにビジネスダイアリー、レポート用紙、専用カバン、マグカップといったおみやげをもらったが、残年ながらプログラムと要旨集は部数が足りず、参加費を払ったのにプログラムをもっていない人がじつに多かった。

また期間中、じつに多くのレセプションが開催され、私たちはほぼ毎日なんらかのレセプションに招かれた。そうしたレセプション会場への交通機関はすべて実行委員会によって手配され、レセプション終了後の遅い時間にはホテルまでバスで送ってくれる心くばりもあった。エチオピアに滞在された方はご存じであろうが、エチオピアはバスにせよタクシーにせよ、自分の「足」を確保するために最大の努力を要求される場所である。そうした経験を持つ多くの(特に外国人の)参加者にとって、こうしたスムーズな交通機関の手配は新鮮な驚きであったといえよう。閉会式においてChristopher Clapham氏が述べていたように、私もまた実行委員会のかたがたの多大なるホスピタリティに感謝する。

こうした学会単位のレセプションとは別に外国人の参加者は、それぞれの国の大使館などから個別に招待されていたようである。私たち日本からの参加者も、野上駐エチオピア日本大使より公邸にお招きいただき、夕食をともにするという機会を得た。

今学会では、ミシガンや京都での時とはことなり、事前に論文集を刊行しなかった。発表者はめいめい論文を修正する時間を与えられ、そのめ切りは2000年12月30日と定められた。原稿が着実に集まれば、2001年中には刊行されるだろうとのことだ。

今回は2003年、ドイツのハンブルグで開催される。

附記

本稿脱稿後、Institute of Ethiopian Studiesのウェブサイトに最終的な参加者数が公表された。それによれば予定された発表者は262名、そのうち実際に研究発表を行ったのは201名だそうである。またオブザーバー参加は137名であり、発表者と合わせると参加総数は338名である。参加者の国籍26ヶ国。日本国籍者は11名で、スウェーデンと並んで7位である。

注

- (1)この学会の沿革については栗本英世氏による解説を参考にされたい(「国際エチオピア学会小史」JANESニュースレターNo.4, 1994. pp.21-23)
 - (2)栗本英世「スリリングな国際学会」JANESニュースレターNo.7, 1998. pp.40-43.
 - (3)こうした政治性の表出がまったく無かったわけではない。現在ドイツに居住するBairu Tafla博士のヴィザ発給拒否問題がそれである。Bairu博士はハンブルグにお住まいで、2002年に刊行開始が予定されるEncyclopaedia Aethiopiaの編集委員にも名前を連ねているが、エリトリア出身であるとの理由で、学会参加のためのヴィザ発給をエチオピア政府により拒否された。この問題はさきのEncyclopaedia Aethiopia関連のセッション、およびHistoriographyに関する歴史学のセッションで問題となったが、それが学会全体のおおきなうねりを作り出したかということ、まったくそうではない。
 - (4)Donham, Donald, L. Marxist Modern: An Ethnographic History of the Ethiopian Revolution. University of California Press, 1999.
 - (5)これに関連するものとして、おもにドイツの人類学者たちによって進められている、南オモ博物館&研究センター(SOMARC: South Omo Museum and Research Center)のプロジェクトを挙げておく。同センターは南オモのジンカに建設が進められているもので、2001年9月にオープンが予定されている。
- (ますだ けん 神奈川大学日本常民文化研究所)